

教養セミナーにおける LTD 話し合い学習法の 試行的導入

山口 拓 史

はじめに

本稿は、愛知学院大学（以下、本学という。）における教養セミナー「学問の発見」Ⅰ・Ⅱでの LTD 話し合い学習法（LTD は Learning through Discussion の略。以下、LTD ともいう。）の試行的な導入に関する教育実践報告である。

2012（平成24）年4月から本学教養部（教育学教室）に着任することとなった筆者は、新年度から担当予定の授業のなかに専門分野である教育学の講義以外に教養セミナー「学問の発見」があることを知り、その授業計画を立てる必要があった。教養セミナーは、「各担当者が創意工夫したバラエティーに富む内容となっており、少人数のセミナー形式で実施」するものとされており、この趣旨に見合った授業として興味をもったのが LTD である¹⁾。その時点で筆者は「LTD 話し合い学習法」について、事前に一定の知識をもっていたわけではなかった。その意味において、今回の LTD を活用した教養セミナーは文字通り「試行的導入」であったといえる。

まもなく今年度の授業が終ろうとしている現在、いわば“見様見真似”の状態で行ってきた LTD は、筆者の不安な心情をよそに、幸いにも受講生には一定の学習効果を与えたようである。本稿は、その足跡を記して後学のために執筆したものである。

1 教養セミナー「学問の発見」の概要

2012年度現在、本学には表1に示す8学部17学科が設置されており、それらの授業科目は

教養教育科目と専門教育科目に区分されている。本稿で述べる教養セミナー「学問の発見」（以下、セミナーともいう。）Ⅰ～Ⅳ（各期1単位）は、教養教育科目の選択科目として開講されており、少人数（1クラス25～30名程度）のセミナー形式で行われる授業である。また、本学の1年次生（入学生）は、セミナーⅠ（春学期）と同Ⅱ（秋学期）を必ず履修することとされている²⁾。1年次生は、年度当初のガイダンスの際、セミナー各担当者による授業概要プレゼンテーションを聞いた上で1位～4位の希望順位をつけて選択申し込みを行い、それに基づいて最終的なクラス分けが行われることになっている。

表1 愛知学院大学の学部・学科一覧

学 部	学 科
文学部	宗教文化学科、歴史学科、日本文化学科、国際文化学科、グローバル英語学科
商学部	商学科、ビジネス情報学科
経営学部	経営学科、現代企業学科
法学部	法律学科、現代社会法学科
総合政策学部	総合政策学科*
心身科学部	心理学科、健康科学科**、健康栄養学科**
薬学部	医療薬学科**
歯学部	歯学科**

備考 「*」は授業科目として教養セミナーⅢ・Ⅳのみ。

「**」は授業科目として教養セミナーなし。

（本学学則第4条、第8条より作成）

2 「LTD 話し合い学習法」の試行的導入

(1) 大学教育モデルとしての LTD

最初に、本稿で取り上げる LTD による教育実践について、その概要を説明しておきたい。本稿で紹介する LTD は、特に断らないかぎり安永悟『実践・LTD 話し合い学習法』（ナカニシヤ出版、2006年。以下、[安永2006]と記す。）に依拠したものである³⁾。以下、本節においては同書に基づきながら LTD の概要を説明したのち、次節においては筆者が実際に試行した LTD の具体的内容を示すこととする。

LTD は、社会心理学者であるウィリアム・F・ヒル（アメリカ・アイダホ大学）が約半世紀前に考案した協同学習の一技法であり、1962年に LTD を紹介する最初のテキストが刊行されている。その後、J・レイボウらが改訂版を1994年に刊行しており、その改訂版の和訳が丸野俊一・安永悟によって1996年に刊行されている⁴⁾。半世紀前のアメリカの大学において LTD が考案された理由は何であったのか。[安永2006]では、次のように述べられている⁵⁾。

……多くの学生たちは将来に夢をもてず、大学での学びに失望していました。主体的に学べず、学習に対して受動的であり、学習の過程よりも結果を重視し、理解よりも記憶が中心の

学習が主流を占めていました。このような状況に心痛めたヒル博士は学習本来の喜びを学生たちに体験させ、もう一度、学びの世界に連れ戻したいという強い希望から新しい学習法の考案に取りかかりました。

[安永2006]によると、LTDは「真の学びの追求」を目的とした、小グループによる話し合いを中心とした学習法であり、対等な話し合いを通じて参加者一人ひとりの学習と理解を深めていくという点で、「グループ・ダイナミクスと心理学の研究知見に依拠した理想的で実践的な学習法であり、対話法」であるとされている⁶⁾。そうした LTD の特徴のいくつかを次に掲げておく。

第1は、LTDの対象者は主として大学生、専門学校生、社会人とされているが、話し合いに必要な言語能力や対人関係能力など最低限の能力があれば誰にでも利用が可能である。また、近年では小学校の高学年児童（国語）に対しても導入可能であることが実践研究によって明らかになりつつある⁷⁾。

第2は、LTDにおいては学習課題としてテキストを使用することになっているが、そのテキストの形式に関して特に制限はない。論文、評論、論説、随筆、新聞記事のほか書籍の一部分（1章分）など文章であれば、分野・領域も自由に選ぶことが可能であるとされている。ただし、そうしたテキスト課題の選定と配列は、LTDの成否を左右する重要な要因である。LTDでは、教員が一方的に話す講義とは異なり、課題の選定・配列を通じて話し合いの内容を間接的に方向づけ、授業目標の達成を図ることをめざすためである⁸⁾。

第3は、LTDは参加者が一人で行う「予習」とメンバーと話し合いながら学ぶ「ミーティング」の二つの活動から構成される。「LTD話し合い学習法」という名称からミーティング活動のみに意識が向けられるかもしれないが、効果的なミーティングを行うためにはそれに先立って行われる参加者個人による学習課題の予習活動が必須であるとされている⁹⁾。

第4に、LTDは「過程プラン」と呼ばれる一連のステップにしたがって進められる。既述のように、LTDは予習とミーティングという二つの活動で構成されているため、このLTD過程プランも予習用とミーティング用の二種類が用意されている¹⁰⁾。この二種類の過程プランについては筆者が実際に使用したものを次節で掲出することとし、ここでは過程プランの基本的な原理などについて触れておく。

予習用 LTD 過程プランは4段階8ステップで構成される。第1段階は「理解」を中心とする部分で、St. 1（課題を読む）、St. 2（語彙の理解）、St. 3（主張の理解）、St. 4（話題の理解）の4ステップが含まれている。第2段階は「関連づけ」を中心とする部分で、St. 5（知識の統合）、St. 6（知識の適用）の2ステップが含まれている。第3段階は「評価」の St. 7（課題の

評価)の1ステップであり、第4段階は「準備」のSt. 8(リハーサル)の1ステップとなっている。この過程において参加者一人ひとは、これらの4段階8ステップを予習活動として事前に行うことが求められるのである。

また、ミーティング用LTD過程プランも4段階8ステップで構成されており、予習用過程プランとほぼ同様の段階・ステップの構成となっている。繁雑さをいとわず列挙すれば、第1段階(準備)はSt. 1(導入)の1ステップ、第2段階(理解)はSt. 2(語彙の理解)、St. 3(主張の理解)、St. 4(話題の理解)の3ステップ、第3段階(関連づけ)はSt. 5(知識の統合)、St. 6(知識の適用)の2ステップ、第4段階(評価)はSt. 7(課題の評価)、St. 8(活動の評価)の2ステップである。この過程において参加者は、予習過程プランでの学習の成果を手がかりに、理解→関連づけ(統合・適用)→評価という段階・ステップをグループ・ミーティングという形式で協同学習することになるのである。

以上、LTDにおける予習用・ミーティング用の二つの過程プランを略述したが、これらのLTD過程プランはアメリカの心理学者であるB・S・ブルームの教育理論(教育目標のタクソノミー)に基づくものであるとされている。ブルームによると、効果的な学習の過程には六つの活動(①知識、②理解、③適用、④分析、⑤統合、⑥評価)が含まれており、この順番にしたがってこれらの活動を進めることで効果的な学習が期待できるというものであった。LTD過程プランに含まれている8ステップは、ブルームの理論を反映させたものであるという¹¹⁾。さらにブルームの理論によれば、LTD過程プランの8ステップは、St. 1からSt. 4までの「低次の学習」(収束的学習)とSt. 5からSt. 8までの「高次の学習」(拡散的学習)に区別できることになる。両者の関係はいわば「低次の学習」を経てこそ「高次の学習」が成り立つと考えられており、LTD過程プランが効果的な学習を可能とするものであることが推論できる¹²⁾。

(2) LTD 試行的導入の概要

今回、筆者がLTDの導入活用を行った授業は「教育学のチカラ」と題して開講した教養セミナー(I・II)である。受講学生は、表1(前掲)にある経営学部(経営学科・現代企業学科)のAグループ(学籍番号末尾が奇数の者)から第1希望で受講選択を行った25名(男性22名、女性3名。外国人留学生1名を含む。)である。

参考までに講義概要(シラバス)に掲載したセミナーIの情報(一部)を示しておく¹³⁾。

【講義の概要(目標)】 大学という場には、これまでの小学校・中学校・高等学校では学ぶ機会がなかった科目があります。「教育学」という科目もその一つで、国語辞典では「教育の本質・目的・方法・制度・歴史などを総合的に研究する学問」などと説明され

ています。この授業（セミナーⅠ）では、「LTD 学習法」を導入・活用しながら、はじめて教育学を学ぼうとする大学生のみなさんのために、できるかぎり身近なテーマを取り上げます。この授業を通して、みなさんがこれまでに経験してきた学校教育の意味に気づき、さらには今後の大学生活をより有意義なものにする手がかりを見つけていただきたいと思います。さあ、教育学のチカラを探ってみませんか。

【授業の内容・スケジュール】

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. ガイダンス | 9. 課題③（同 第三章） |
| 2. 『大学で学ぶために』 | 10. 課題④（同 第四章） |
| 3. 「LTD 学習法」とは？ | 11. 課題⑤（同 第五章） |
| 4. LTD の準備 | 12. 課題⑥（同 第六章） |
| 5. LTD に慣れる | 13. 課題⑦（同 第七章） |
| 6. LTD を試す | 14. 課題⑧（テキスト全体） |
| 7. 課題①（テキスト第一章） | 15. まとめ |
| 8. 課題②（同 第二章） | |

表2 教養セミナーⅠ

回	主な授業内容
I-1	ガイダンス、受講生30秒自己紹介①
I-2	30秒自己紹介②、『教養セミナー・ハンドブック第Ⅰ部』
I-3	30秒自己紹介③、課題文ワーク、LTD 事前説明①（概要）
I-4	LTD 事前説明②（過程プラン）、学習課題00配布
I-5	LTD 事前説明③（予習ノート作成法）
I-6	予習ノート作成（学習課題01）
I-7	図書館情報センター授業オリエンテーション（入門コース）
I-8	三色ボールペン読書法（学習課題02）1st Group 編成
I-9	LTD ①（学習課題02）
I-10	LTD ②（学習課題03）
I-11	三色ボールペン読書法（学習課題04&05）
I-12	LTD ③（テキスト1章）、記録用紙提出
I-13	LTD ④（テキスト2章）、記録用紙提出、2nd Group 編成
I-14	LTD ⑤（テキスト3章）、記録用紙提出
I-15	まとめ

表3 教養セミナーⅡ

回	主な授業内容
II-1	ガイダンス
II-2	LTD ①（テキスト4～7章）、記録用紙提出
II-3	3rd Group 編成、学習テーマ選定
II-4	テーマ「校則」講義、学習課題資料配布
II-5	LTD ②（校則）、記録用紙提出
II-6	テーマ「いじめ」講義、学習課題資料配布
II-7	LTD ③（いじめ）、記録用紙提出
II-8	テーマ「学校」DVD 視聴
II-9	テーマ「学校」講義、学習課題資料配布
II-10	LTD ④（学校）、記録用紙配布
II-11	テーマ「ゆとり教育」DVD 視聴
II-12	テーマ「ゆとり教育」講義、学習課題配布
II-13	LTD ⑤（ゆとり教育）、記録用紙提出
II-14	まとめ
II-15	補講

さて、以上のような授業計画を立ててセミナーを開始したのであるが、結論から述べると、この授業計画はまさに「机上プラン」であったといわざるをえない。受講生は、既述のクラス分け方法で第1希望者のみであったから、教育学に興味関心をもつ学生であり、かつ、LTD学習法にも一定の興味をもつ学生であることは初回授業（ガイダンス）でも明らかであった。おそらく問題は、受講生に対する筆者の想定が正しくなかったという点にあると思われる。いずれにしても、当初授業計画の調整を行う必要性を感じたため、受講生の反応を見極めながら適宜調整を行った結果が表2と表3に示した授業内容である。以下、LTDを導入のプロセスに重点をおきながら紹介する。

準備段階 セミナーIの授業は4/10から7/17までの全15回実施したが、I-1からI-3まではLTDの環境準備の意味もかねてクラス全員による自己紹介（一人30秒間）を実施した¹⁴⁾。また、I-2では『教養セミナー・ハンドブック第I部』掲載の論考を利用して、キーワードの抽出と著者主張の要約化を次回までの課題とした¹⁵⁾。

事前説明段階 LTDの考え方やしくみを受講生に理解させるための事前説明にはI-3からI-5の3回分を使うこととなった。I-3では[安永2006]12-13頁をもとにしたレジюмеを使用して、LTDが考案された理由とLTDの目的・特徴を中心に講義形式で説明を行った。また、次回提出の課題として、前掲ハンドブック第I部掲載の別論考を課題文章としてキーワード抽出、著者主張の整理、課題文章の評価をノートにまとめるよう指示した。I-4では[安永2006]14-18頁をもとにしたレジюмеを使用して、LTD過程プラン（予習用・ミーティング用）について講義形式で説明を行った。また、次回提出の課題として、[安永2006]125-130頁の「付録A 学習課題」を【学習課題00】として「付録B 予習ノート」（サンプル）とともに配布し、予習用LTD過程プラン（表4）による予習ノート作成への挑戦を指示した。I-5では[安永

表4 LTD過程プラン（予習用）

段階	ステップ	予習内容（ノート作成）	
理解	St. 1 課題を読む	全体像の把握	低次の学習 (収束的学習)
	St. 2 語彙の理解	ことば調べ	
	St. 3 主張の理解	主張のまとめ	
	St. 4 話題の理解	話題のまとめ	
関連づけ	St. 5 知識の統合	他の知識との関連づけ	高次の学習 (拡散的学習)
	St. 6 知識の適用	自己との関連づけ	
評価	St. 7 課題の評価	学習課題の評価	
準備	St. 8 リハーサル	ミーティングの準備	

([安永2006] 17頁より)

2006] 24-37頁をもとにしたレジュメを使用して、予習ノート作成の目的・手順を中心に講義形式で説明を行った。また、次回 (I-6) での予習ノート作成実習に備えて【学習課題01】を配布し、事前に読み込んでおくように指示した。

予習ノート実習段階 上記のような一連の事前説明を終えた後、I-6とI-8の2回分を予習ノート作成の実習に充てることとなった¹⁶⁾。I-6では【学習課題01】を利用して各自で実際に予習ノートを作成する作業を行うこととして、筆者は必要に応じて机間指導を行った。また、時間内に予習ノートを十分に仕上げることができなかった受講生を対象に、その完成を自宅での課題とした。I-8では予習ノート作成をより容易に行うためのツールとして「三色ボールペン読書法」を紹介して、【学習課題02】を利用して実習を行った¹⁷⁾。また、次回以降の LTD 実施に備えて、ミーティング用のグループ編成を行った。その編成方法は、くじ引きによるランダム方式で所属学科・性別などの属性は一切考慮せず、1グループ5名として5グループを編成した。さらに、LTD 実施の際の参考文献として [安永2006] を各グループに1冊貸与できるよう準備した。

ミーティング実習段階 セミナー I に おいて LTD ミーティングを実際に行うことができたのは全5回 (I-9、I-10、I-12～I-14) であった。このうち I-9と I-10は練習段階と位置づけるべきものであったといえる。I-9では【学習課題02】を利用して初めての LTD を行った。この授業では、あらかじめ机・椅子が可動タイプの教室を使用していたため、グループごとにメンバーが車座になって椅子に座り、机は使わない形式で実施した。また、ミーティングの円滑な進行をサポートするため、受講生一人ひとりに名札を用意するとともにミーティング用 LTD 過程プラン (表5) をスクリーンに表示しておいた (写真参照)。I-10では【学習課題03】を利用して前回と同じ状態で LTD を行った。



表2でわかるように、I-11では LTD を行わず、【学習課題04】【学習課題05】を利用して再び「三色ボールペン読書法」の実習を行った¹⁸⁾。2回連続して LTD を行ってみた結果、前述の「低次の学習」(収束的学習) が必ずしも十分ではないために「高次の学習」(拡散的学習) への移行が円滑に行えていないと感じる場面が複数のグループでみられたためである¹⁹⁾。

セミナー I も残すところ4回となった6月下旬以降、指定テキスト (『国家の品格』) を使っ

表5 LTD 過程プラン (ミーティング用)

段階	ステップ	討論内容	配分時間
準備	St. 1 導入	雰囲気づくり	3分
理解	St. 2 語彙の理解	ことばの定義と説明	3分
	St. 3 主張の理解	全体的な主張の討論	6分
	St. 4 話題の理解	話題の選定と討論	12分
関連づけ	St. 5 知識の統合	他の知識との関連づけ	15分
	St. 6 知識の適用	自己との関連づけ	12分
評価	St. 7 課題の評価	学習課題の評価	5分
	St. 8 活動の評価	学習活動の評価	4分

合計60分

〔安永2006〕16頁を一部変更)

てようやく本格的な LTD を行うことになった。I-12でテキスト第1章、I-13で同第2章、I-14で同第3章と連続して学習課題を取り上げてミーティングを行った。また、I-12以降の LTD では「LTD 活動記録用紙」を利用して、ミーティングに対する参加者一人ひとりの事前評価と事後評価を記入させて提出を求めた²⁰⁾。なお、I-11でグループを再編成して、I-12からは新たなグループでミーティングを行うようにした。

以上がセミナー I における LTD 導入のプロセスである。次に、夏期休業をはさんで開講されたセミナー II における LTD 実践について述べることにする。

セミナー II では、ガイダンス (II-1) 後の II-2以降で計5回の LTD ミーティングを行ったが、II-2ではセミナー I の指定テキストの未消化分 (第4章～第7章)を一括学習課題としてミーティングを行った²¹⁾。II-3では3回目のグループ編成を行い、そのメンバーでセミナー II における最後のミーティングまでを行った。また、このとき LTD で取り上げたい教育学関連のテーマを受講生にリクエストさせて、そのランキングにしたがって四つのテーマ (校則、いじめ、学校、ゆとり教育)を選定した。これ以後の授業では、表3に示したように、教育学上のテーマに関する講義 (配布資料を含む) や映像資料の視聴を行う授業と同テーマで LTD ミーティングを行う授業を1セットにして行うようにした。これによって、ほとんどの受講生が学習ツールとしての LTD の性格を実感したようである。

3 授業実践の考察—受講生の変化を中心に—

ここでは、教養セミナー I・II において受講生が提出した感想文や「LTD 活動記録用紙」などを資料として、LTD による受講生の変化を中心にコメントを加えておきたい。まず、セミナー I における受講生の意見からみておきたい²²⁾。

①「自分がミーティングに貢献できなかったのでメンバーに迷惑をかけたが、自分にとっては

メンバーの発表を聞いて次のミーティングへの姿勢について参考になった。次は自分もメンバーに負けないようなノートを作りたい。」(男性)

- ②「今回人に頼ることが多かったので、次回はしっかりと予習ノートを作り、頼りになるようにしたい。」(女性)
- ③「同じ本を読んでみても、人それぞれで理解の仕方や考え方などが違ったり、様々な読み方があったりして興味深かった。今後はその読み取り方の違いをお互いに話し合ってみよう。」(男性)
- ④「前のグループでのミーティングはとても時間が長く感じられて苦痛だったが、今回のグループでのミーティングは時間が短く感じられて楽しく意見を言い合うことができた。」(男性)
- ⑤「留学生がいることによって、日本と外国との違い、特に価値観、道徳観の点で話し合うことができて興味深かった。」(男性)

セミナー I の段階では、すべての受講生が LTD 未経験者であったにもかかわらず、多くの受講生が LTD に抵抗感をもつことなく順応していることが推測できる。①②③に代表される意見には、個人学習では得られないであろうと思われるよい意味での緊張感を感じることができる。⑤はクラスでただ一人の留学生が含まれていたグループには共通する意見であり、おそらく日本人学生・外国人留学生の双方にとって新鮮かつ刺激的な経験になったと思われる。また③⑤では、個性や国籍などの違いから生じる視点や価値観の多様性に対する理解の深まりを期待できるものと思われる。

次に、セミナー II における受講生の意見をみておきたい。

- ⑥「予習ノートを作っている人が少ないグループでは話し合うことが難しい。グループ変更をしたら、しっかりとしたミーティングがしたい。」(男性)
- ⑦「話し合いがすごく深まった。外国の教育制度などを留学生から聞けて良い体験となった。」(男性)
- ⑧「今日のミーティングではグループでまとまった話し合いができたので非常に良かった。またこのグループでミーティングがしたい。」(男性)
- ⑨「きちんと予習をしてきたので前回よりスムーズにミーティングを行えた。やはり予習ノートを作ることは話題を理解するのに重要だと思った。」(男性)
- ⑩「教育の問題点などについてしっかりと話し合うことができてよかった。もっといろいろな知識を持って自分の意見を持つことが大切だと感じた。」(男性)

- ⑪「今回の話題に関する私の関心が高まった。グループで話す楽しさを実感した。すごく楽しかった。また勉強したい。」(女性)
- ⑫「充実していた。真剣に話し合いができた。」(男性)
- ⑬「本当にこの授業のおかげで日本、学校、教育について深く理解できるようになった。」(女性)
- ⑭「LTD は、議題についてやる気のある人が集まらなければ効果を得ることができないと思った。」(男性)

セミナーⅡの段階では、すでに LTD を数回経験していること、受講生の興味に見合った課題テーマであったことなどの理由から、LTD システムそのものに対する驚きや感動の表明という色合いが薄れ、受講生の関心が学習課題(テーマ)に向けられつつあることが読み取れるのではないだろうか。たとえば⑦⑩⑪⑬からは、受講生が LTD を学習ツールとして使いこなすような段階に入り、課題テーマと向き合うことで理解の深まりを感じ取っているものと思われる。その一方で、一定レベルの LTD を経験した受講生は、不十分な LTD に対する嫌悪感にも似た感情をもつようになることが⑥⑭あるいは④から読み取れる。

最後に、学習課題の理解という観点から、テキスト理解と LTD の関係に触れた意見をみておきたい。

- ⑮「初めて読んだ時今まで授業で読んでいたものに比べて内容がとても難しいと思った。しかし、予習ノートの作り方通りに語句を調べたり作者の意見を考えたりしながら読むことで少しずつ内容が理解できた。」(女性)
- ⑯「今回、国家の品格を読み、多くの意見に納得させられた。しかし、納得するだけでなく自分の意見も思いついたりした。改めていろいろ勉強になった。」(女性)
- ⑰「今回、この LTD 学習法で国家の品格を読んでみて、ふだんあまり本を読むことのない私でもこの本の内容を理解し、さまざまな議題に対して話し合うことができた。」(男性)
- ⑱「最初は分からなかった文章であったが、線を引いて読んでいくことで筆者の言いたいことがだんだんと分かってきて、ここは筆者と同じ意見だと思うところもあれば、ここは違うと思えることができるようになった。」(男性)
- ⑲「今回、初めて LTD 学習法をやってみて討論の方はディスカッションのように楽しかったが、予習にはすごく時間がかかった。しかし、三色ボールペンで分野ごとに分けることによって、よりわかりやすくまとめることができて理解が深まった。」(男性)
- ⑳「LTD 学習法で学んでみて思ったことは、普段から本を読まない自分がこの本を読んで、

最初は正直読むのも嫌になるほど漢字や意味がわからない事が書いてあって、読んでも意味がまったく分からない事が多くて大変だった。でも2回、3回と読んでいくうちに自分の中で少しずつ内容が分かってきたので、自分もやればできると思った。」(男性)

若者の本離れが指摘されて久しいが、受講生の多くは読書経験が豊かでないといわざるをえない。実際に書籍1冊を読了した経験がないと打ち明けてくれた学生もいた。セミナーIで指定したテキストは一般的な新書判であり、265万部超のベストセラー書籍である。⑮⑰⑱⑲⑳からは、受講生が予習段階で新書判テキストに孤軍奮闘する姿が連想される一方で、LTD予習過程プランを忠実に実行したり、三色ボールペン読書法を利用したりすることで「自分もやればできるな」と自信をつかんだことが読み取れる。こうした経験は学校教育の早い段階で積み重ねるべきものの一つであると筆者は考えるが、もしそれが十分ではなかった場合は学校教育の最終段階でもある大学生時代に経験を重ねて磨きをかける必要があると思われる。その意味においてLTDは極めて魅力的な学習経験であるといえるであろう。

おわりに

今回、「見様見真似」の形で教養セミナー「学問の発見」I・IIの授業においてLTD話し合い学習法を試行的に導入してみた。今日「学士課程教育」という言葉が浸透する状況にあって、「主体的な学修」が求められている。おそらくそれは多様な意味内容をもつにちがいないが、「感銘と感動を与え知的好奇心を喚起する授業」は主体的な学修を実現する有効な方法の一つであるとする²³⁾。

LTDは、それ自体が教育目的そのものではなく、教育上の方法であることはいまでもない。[安永2006]では「LTDの効果=予習の効果×ミーティングの効果」と表現され、LTDの活用によって期待される学習効果は予習とミーティングの相乗効果として現れるという。その具体的な効果は、①学習課題の理解の深化、②分析的、論理的、批判的思考スキルの獲得、③言語スキルや対人関係スキルの発達、④個人的な満足の獲得と学習意欲の向上、⑤教授・学習スタイルの変化、⑥民主主義に対する認識の変化、と整理されている²⁴⁾。

今回のLTD試行的導入によって、六つの学習効果すべてを確信できたわけではないが、その効果を予見させる確かな反応を受講生から感じ取ることができたように思う。まだうまく表現できないが、LTDを活用することによって学修における〈理解→関連づけ(統合・適用)→評価〉の連鎖反応を生み出し、学士課程教育のコアともいえる初年次教育の効果を高めていくことが十分に可能であるとする。今後、LTDを活用したさらなる教育実践を試みたい²⁵⁾。

LTD 活動記録用紙

グループカラー：	日付： 年 月 日 時限
学籍番号：	氏名：

事前記録欄

1. ミーティングを始めるのに先立って、次の各項目について0～10の段階で評定してください。なお、「どちらともいえない」場合は「5」とします。

0 ----- 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5 ----- 6 ----- 7 ----- 8 ----- 9 ----- 10

(全く認めない)

(とても認める)

- () ① 私は事前準備（予習）ができています。
- () ② 私は今回の課題に興味・関心を持っている。
- () ③ 私は課題の内容を理解できています。
- () ④ 私は今日のミーティングに参加したい。
- () ⑤ 私はミーティングに貢献できると思う。
- () ⑥ ミーティングでは、グループ全体として各ステップをうまく行えると思う。

2. 自分も含めたミーティング参加全員の氏名を書いてください。また、時間係には「レ」印を付けてください。

- 自分： _____ () □仲間： _____ ()
- 仲間： _____ () □仲間： _____ ()
- 仲間： _____ ()

事後記録欄

1. ミーティング終了後、次の各項目について0～10の段階で評定してください。なお、「どちらともいえない」場合は「5」とします。

0 ----- 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5 ----- 6 ----- 7 ----- 8 ----- 9 ----- 10

(全く認めない)

(とても認める)

- () ① 今日のミーティングでは、グループ全体として各ステップをうまく行えた。
- () ② ミーティングを通して、課題に対する私個人の理解が深まった。
- () ③ 今回の課題に対する私の興味・関心が高まった。
- () ④ LTD 話し合い学習法をまた行いたい。
- () ⑤ このグループでミーティングをまた行いたい。

2. 自分も含めたミーティングにおける参加者の貢献度を評価してください。事前記録欄「2」の()内に、1(低い)-----2(普通)-----3(高い)の段階で評価してください。

3. 今日のミーティングについて、意見や感想、質問などを自由に書いてください。

.....

.....

.....

.....

.....

注

- 1) 本学教養部ホームページ (<http://kyouyou.agu.ac.jp/seminar.html>) には、次のような説明がある。
「大学は、自ら学ぼうとする人のためにあります。学生の皆さんは、知識を獲得する姿勢を受動型から能動型へと転換し、関心のある分野の学習・研究方法を身に付けなければなりません。教養セミナーⅠ・Ⅱ「学問の発見」は、各担当者が創意工夫したバラエティーに富む内容となっており、少人数のセミナー形式で実施されます。」
- 2) 学則上、セミナーⅠ～Ⅳ（各Ⅰ単位）はすべて選択科目であるが、カリキュラムの運用上Ⅰ年次生はセミナーⅠ（春学期）およびⅡ（秋学期）を必ず履修するものとされている。また、同セミナーⅠ・Ⅱの内容は各担当者が創意工夫したバラエティーに富むものとなっており、その担当者はⅠ・Ⅱ年次のアドバイザーとして授業や成績配付、学生生活や履修上の相談等を通じて大学生活のサポートを行うことになっている。
- 3) LTD 話し合い学習法を試行的に導入するにあたっての参考文献は、たとえば、J.レイボウ他著、丸野俊一・安永悟訳『討論で学習を深めるには LTD 話し合い学習法（第2版）』（ナカニシヤ出版、1997年）など複数あるが、安永氏による最近著である『実践・LTD 話し合い学習法』（ナカニシヤ出版、2006年）を依拠文献とした。
- 4) J.レイボウ他著、丸野俊一・安永悟訳『討論で学習を深めるには LTD 話し合い学習法』（ナカニシヤ出版、1996年）
- 5) [安永2006] 12-13頁。
- 6) 同前。
- 7) 須藤文・安永悟「読解リテラシーを育成する LTD 話し合い学習法の実践—小学校5年生国語科への適用—」『教育心理学研究』第59巻474-487頁、2011年。
- 8) [安永2006] 86-87頁。
- 9) [安永2006] (14-15頁) では、「予習なしにミーティングをしても LTD に期待される効果はえられません。そもそも予習なしのミーティングを LTD 話し合い学習法とは呼びません。」と述べ、グループを用いる協同学習 (LTD) においては集団思考 (ミーティング) と同等以上に個人思考 (予習) が大切であることを指摘している。
- 10) [安永2006] 15-18頁。
- 11) 杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ編著『大学授業を活性化する方法』117頁（玉川大学出版部、2004年）
- 12) 同前。低次の学習と高次の学習の関係について、後者が前者に比べて優れているのではなく、前者が基礎となり、後者が可能となるとされ、「取束的な学習がしっかりできて初めて拡散的な学習が可能」となるとされている。
- 13) シラバス中にある『大学で学ぶために』（教養セミナー・ハンドブック第Ⅰ部）は、『日本語表現法』（同第Ⅱ部）とともに本学教養部が初年次教育向け共通教材として編集発行し、無償配付しているものである。また、本セミナーで筆者が指定したテキストは藤原正彦『国家の品格』（新潮新書、2005年）である。
- 14) 自己紹介では、LTD ミーティング時のコンパクトな発言をイメージさせることを意識して時間を一人30秒間に限定した。
- 15) 課題内容は、『教養セミナー・ハンドブック第Ⅰ部』第Ⅰ章中の論考を選択し、それに対して3～5個のキーワードを抽出するとともに、著者の主張をノート3行程度にまとめることとした。

- 16) I-7は、本学図書館情報センターが主催する図書館利用オリエンテーション（入門コース）プログラムの受講予約を行っていたため同プログラムに参加した。
- 17) 齋藤孝『三色ボールペンで読む日本語』（角川文庫、2005年）によって説明を行った。
- 18) 本授業で利用した【学習課題】は次のとおりである。
学習課題00：安永悟「大学での学習法」（[安永2006] 125-130頁。）／学習課題01：青木千恵「『ゆとり世代』について」（『禅の友』752号、12-13頁。）／学習課題02：水谷修「『英雄』の陰に庶民の涙」（「夜回り先生エッセー」中日新聞、2012.4.2付。）／学習課題03：水谷修「買い物『心』に出会える商店街」（「夜回り先生エッセー」中日新聞、2012.5.14付。）／学習課題04：青木千恵「『いじめ』の構造」（『禅の友』753号、12-13頁。）／学習課題05：青木千恵「言葉の海の中で」（『禅の友』754号、12-13頁。）
- 19) その典型的な事例として、St. 4からSt. 6での話し合いが低調気味になり、その結果として話し合いが学習課題から脱線していく場面が認められた。
- 20) 「LTD 活動記録用紙」は、[安永2006] 135頁をもとに一部変更を加えたものを使用した。その様式を本文末に掲載した。
- 21) テキスト第4章～第7章を一括学習課題とするにあたっては、事前にセミナーⅠの最終授業において、テキストの読了と予習ノート作成を夏期休業中の自習課題としておいた。
- 22) 以下に紹介する受講生の意見は原則として時系列順に記載してある。また各意見については、筆者の判断によって文意を損なわない範囲で表現を改めたものがある。
- 23) 中央教育審議会「新しい時代における教養教育の在り方について（答申）」第3章第2節（2002年2月）には、「感銘と感動を与え知的好奇心を喚起する授業」に言及した次のような一節がある。
「大学の授業は、本来、教員と学生との語らいと切磋琢磨の場であり、学生が知的・人間的に成長する場であらなければならない。各大学は、魅力あるカリキュラムづくりを進めるとともに、授業方法の改善等を図り、学ぶことの愉しさと意義を味わわせ、感動を与えるような授業の実現を目指す必要がある。」
- 24) [安永2006] 18頁。
- 25) 今回本稿では教育実践報告という形式で執筆した。今後、初年次教育におけるLTD話し合い学習法の在り方に関する考察を続ける中で、本稿では十分に言及できなかった論点や課題についても機会を得て明らかにしていきたい。

【付録】

教養セミナー最終授業において、受講生に1年間のセミナーを振りかえった感想を書く機会を提供した。紙面の許す範囲で紹介しておきたい。

この授業を受けて、LTD学習法というものを知りました。いままで私が高校で受けてきた授業とは違い、グループでミーティングをしながら進める授業がとても新鮮で、いい意味で楽しく授業を受けることができました。それと同時に予習もなかなか大変でした。このLTD学習法がとてもよかったのは、中国人留学生の方と意見を交換する事ができたことです。普段はなかなか話す機会がないのですが、この授業のおかげで、外国から見た日本について知ることができました。中国の教育等も知ることができ、とてもためになりました。（現代企業学科・男性）

教養セミナーにおける LTD 話し合い学習法の試行的導入

LTD 学習法で話し合いをすることによって、テーマに対する理解や考えなどが大変深まった。自分のグループには、留学生がいたが中国の教育環境の違いには大変驚いた。大学に入るまでは狭い部分でしか物事を学べなかったが、大学では留学生の話聞けたり広い分野を学ぶことができる。自分は、LTD 学習法で、その大学の魅力を感じることができた。この経験は、自分にとって、大変プラスな経験になった。また、話し合いを重ねることによって、人と対話する能力が必要になってくる。この力も、大学にいる間にしっかりと上げていきたい。(現代企業学科・男性)

今までは授業といったら先生の話聞いて意見や発表があったら発言をするといった形ばかりでしたが、今回 LTD 学習という授業を受けてみて、グループで意見を出し合い、いろいろな考え方があるのだと改めて考えさせられました。今までの授業とは全然違い、新鮮でとても楽しかったです。また LTD 学習を行いたいと思いました。(経営学科・女性)

1 年間、教養セミナーを受講して感じたことは、人によって考え方や感じ方が千差万別であるということだ。例えば、自分と意見が大体同じだったとしても、まったく同じだということはまずないだろうし、自分の考えを他人に伝えようとする時に使う言葉や方法も違っているだろう。今後は、よりさまざまな考え方をしていいる人がいるということを理解し、周りの人と意見をすり合わせていながら、問題を解決していく能力を身につけていきたい。(経営学科・男性)

教養セミナーの授業を 1 年間受けてみて、今の学校の問題点であったり、明治時代の授業の内容であったり、読んだことのない本をみんなで話し合うのは楽しかった。グループの人の意見を聞くのは理解が深まるし、少し雑談もあったけれど、何よりクラスの人と仲良くなれる授業はセミナーぐらいしかなかったので、とても楽しかった。(現代企業学科・男性)

1 年間 LTD の授業を受けて、考える力がつきました。最初、LTD 学習というシステムを全く知らなかった私は、先生の話についていくことで精一杯でした。しかし、予習ノートを家で作成していくことで授業も考えを深めることができ、楽しい討論をすることができました。また、ノートをゆっくり自分で考えて作成することにより、筆者の考えに共感する所、反対意見などを冷静にとらえることができました。これからも LTD 学習をする機会があれば、ぜひ行いたいと思いました。(経営学科・女性)

1 年間教養セミナーの授業を通して、LTD を知り、他の人との意見交換をすることでいろいろな意見を聞くことができた。なにより他の授業よりもたくさんコミュニケーションをとる機会があり、今まで話をしたことがなかった人ともこの授業を通して話ができるようになり、自分自身でもコミュニケーション能力を養うことができた。LTD は、貴重な体験であったと思っている。これからももっとコミュニケーション能力を養っていきたい。(経営学科・男性)

LTD の授業で様々なテーマのミーティングをしてきたが、どのテーマでも意見が全く違う人が必ず一人はいて、今思うと驚きだ。同じ文章、同じ話を聞いて、同じテーマで話し合っているのに違う意見が出てくるので、毎回のミーティングで新たな発見があり、とても自分のためになったと思う。そして自分と違う意見を聞いた時に、自分の意見が大なり小なり変化していくので、学生として社会人として役に立つ授業だった。(経

営学科・男性)

LTDの授業を1年間受けてみて一番に思うことは、自分には全く向いていなかったということです。私は話すことが苦手で、ましてや5人ぐらいのグループになって話し合うことは最も苦手でした。しかし、この授業を1年間受けて、多少は改善されたような気もします。話し合いが好きになったわけではないが、これからも機会があれば参加しようと思います。(現代企業学科・男性)

私はこの1年間、教養セミナーのLTD学習法というものを学び、物事に対する考え方が変わったと実感することができた。いままでの私は、例えばニュースなどを見ていると、普通に見ていることしかなかった。しかし、このLTD学習法を通して、ニュースを見れば私なりの考えが頭の中に勝手に浮かんでくるようになっていた。このLTD学習法を通して私は、このような勉強法に出会えてよかったと思う。この方法は必ず将来にも役立つと思うので、身近な問題にもこの考え方をぜひ取り入れてみたいと思った。(経営学科・男性)

1年を終えて思ったことは、考え方が変わったことである。大学生になり、新たな人と話してみても新しい考え方を知ることができた。また一番勉強になったのは、留学生と話せたことだと思う。日本と中国との違いを大きく感じ、外国に少し興味を持つようになった。やはり日本にいただけでは日本の良さも悪さも感じるには限界があるので、外国に出てみるのも大事かなと思った。(現代企業学科・男性)

今まで他人と定期的に討論するという機会がなかったのでおもしろかった。しっかりできたかは別として、予習をして臨むということができるようになった。ほとんど話したことの無い人といきなり難しい話題で討論するのは大変であったが、これから先の就活などでそれが生きてくるのだろうと思う。(経営学科・男性)

1年間教養セミナーでLTD学習という新しいことをして、初めは誰一人として知らなかった人たちばかりで、あまり活発な話し合いをすることができなかった。しかし、回数を重ねていくことで、一人ひとりが自分の意見を持ってそれを話すことで、一人の意見をみんなで共有し、それに対して他の人がどう思っているのかが自然に出てくるようになったので、とてもよいミーティングになった。逆に仲が良くなり過ぎて、ミーティングのテーマとは違う話をしてしまうこともあったが、LTD学習を通して思ったことは、一人で勉強すれば一人の意見しかないのが全てだが、多数の人と勉強することで自分の中にはなかった発想、意見が出るので、自分の視野が広がってとてもよい学習法だと思った。(現代企業学科・男性)

この授業は、ほかの授業よりもしっかりとやっているという印象がある。この授業を選んだ理由はしっかりといろいろな人と話し合いができ、授業を通して自分とは違ういろいろな意見を知ることができると思ったからである。しかし実際は、自分に甘え予習をしてこないことがあった。1年ではゼミがないので、この大学においてこの授業はとても有意義であったと思う。だからこそもっとしっかりとやりたかったという気持ちがある。しかし少しはこの授業を通して、違う人の意見を得ることができたので、それをこれからの大学生活や卒業後の人生にいかしていくことができれば良いと思う。(現代企業学科・男性)